



「物語作家に才能は必要か？いいやそうは思わない。読むこと（なるべく多くのジャンルを）、書き写すこと（名文を）、書き続けること（忍耐）まずこの3つを行ってから、才能の話をしてようじゃないか。なあ諸君」Twitterのブログ主発言より

僕が作家養成講座のような講義を担当するはめになったら、オリエンテーションで、きつこう言うだろう。

「何か小説を書いてみれば？」僕が人にそう言うと、まず無理だと言う。大概是、才能がどうかとか文才を言い訳にする。次に時間がないとかだろう。時間と才能は本当に言い訳で、熱意があれば書けるものだ。逆に無理だと言う人間は熱意がない。才能でも時間でもない。だいたい才能なんていい加減なことを良く言えるなど。ゴッホは生前、評価されていないのだよ？時間についても言うと、締め切りのあるプロ以外は、いつ書き終えてもよいのだから時間は問題にならない。

さて前置きが長いと、電子書籍化した際に売れないと思われるので、次に行こう。そうしよう！

作家志望で読書嫌いがいたら、珍獣である。保護すべきである。少なくとも僕は知らない。そんなレアキャラ。大概是好きだろう。ただ読書家＝作家ではない。ゲーマー全員がカプコンやスクエニで働いているわけではないから当然だろう。消費者と創造主にはやはり差異がある。それでもクリエイターサイドに回ろうと思えば

- ・読むこと（なるべく多くのジャンルを）
- ・書き写すこと（名文を）
- ・書き続けること（忍耐）

直前の話題とも重複するのだが、読むことは大事だ。純文学ばかり読んでいても視野が狭いし、ライトノベルだけ読んでいてもいけない。そもそもメタジャンルな昨今は、何でも屋の方が有利だろうし、相手にできる読者数も多くなる。狭いよりは広いほうが良いだろう。またカタルシス（文学作品などの鑑賞において、そこに展開される世界への感情移入が行われることで、抑圧されていた感情が解放され、快感がもたらされること）を生み出す上で、ミステリー作品などは大変参考になる。謎が放置のままではカタルシスは生まれなため、ミステリーは教材として有効だ。また悲劇物も泣けることや喪失感を売りにしているので、大変参考になる。だからジャンル限定読書は作家志望においては、お勧めしない。ミステリー作品の展開を変えるだけで、純文学に書き換えることも可能だ。森見（モリミー）も万城目（マキメー）も書き方さえ換えれば狭義のライトノベルを生み出すことは可能だし『限りなく透明に近いブルー』と『69』では全く作風が違うが、村上龍の作品である。書き分けが可能になれば、多彩な読者へのアクセスとジャンルや作風にあったテーマを活かすことも可能になってこよう。

次に書き写すことだが、今日の日経新聞の朝刊に、リービ秀雄の文章が載っていたがあれは良かった。描写の参考になる。名文は読むより書き写す方が勉強になると思う。文章のテンポや味などは書き写した際の方が、実感できることが多いからだ。また構造を分析する際にもプロット作りにも役立つことが多い。

この二点を準備段階と見做せば、本番は実際に自分で書くことである。さて突然だが、皆さんの記述力はかなり高いはずだ。なんせ明治初期と違って文盲もいないし、ブログでもケータイ小説でも書いているではないか。もう書きなれていると言ってよい。だが、特に長編を書き上げるとなると、これが辛い。『西遊記』や『水滸伝』などを書き上げようとしたら、ぞっとする。恐ろしいくらいに忍耐と体力が、書くことの意味で必要だ。吉本隆明と糸井重里の対談本『悪人正機』で5年だったか10年続けたら一流だと言っていた記憶があるのだが、まあそんなものだろう。継続は力なりと言うとあれだけど、文筆で生きていくなりしようと思えば、とにかく書くしかない。この作業が筋トレに極めて近い。とにかく書いて書いて書き続けないと上達しない。それも「完結した作品」を書かないと、うまくならない。中絶作品をいくら書いても駄目なのである。以外これが辛いところで完成した作品を、どれだけ（バリエーションも含む）書いたのかで、こなれているかが分かってくるだろう。そういう意味では、5年だか10年だかは書き続けていることになるだろう。

この3つの基礎をやった上で、才能が無いと嘆くのなら結構だが逆に書く前から「俺には才能がない」なんて断言できる奴の方が、ある意味で凄いなと思っちゃう。とんでもない目利きだなと。本当は諦めが早いだけかもしれないがね。どうです。お客さん？

前回のおさらいをすると

- ・ 読むこと（なるべく多くのジャンルを）
- ・ 書き写すこと（名文を）
- ・ 書き続けること（忍耐）

この3つの基礎を継続することが筆力養成、つまりは文章が上達する路だと説いた。

そして、書いてみようかなと思った方もいるかもしれない。そういう時は、勢いのまま書くとよい。

仮に下手でも書いたものを後で手直しすることは可能だ。まずはその、情熱を原稿にぶつけることが元気があってよい！

さてさて僕も、そう言いながら書き続けてきたわけだが、少し慣れてくると悩みが湧いてくるもの。立ちどまってしまう瞬間があることだろう。この時、書くということは辛い。大変シンドイ思いをする。それでも前に進めば道は開ける。だから進もう。

これで終わり。これで完璧というものは創作にはない。

終わらないマラソン。じつに大変そうな響きだが、楽しい物語の残りページが少なくなるのと同じで、実はゴールするのが寂しいのかしれない。

それではまた次回にお会いしましょう。次は描写を予定しています。

でも、それは僕の気分次第。つまり天気と一緒に笑